《小学校　特別活動》

課題と向き合い，協働して自主的，実践的に活動する児童の育成

～課題意識を高める議題化の工夫と効果的な助言・価値付けを通して～

那覇市立城岳小学校教諭　神﨑　歩

〈研究の概要〉

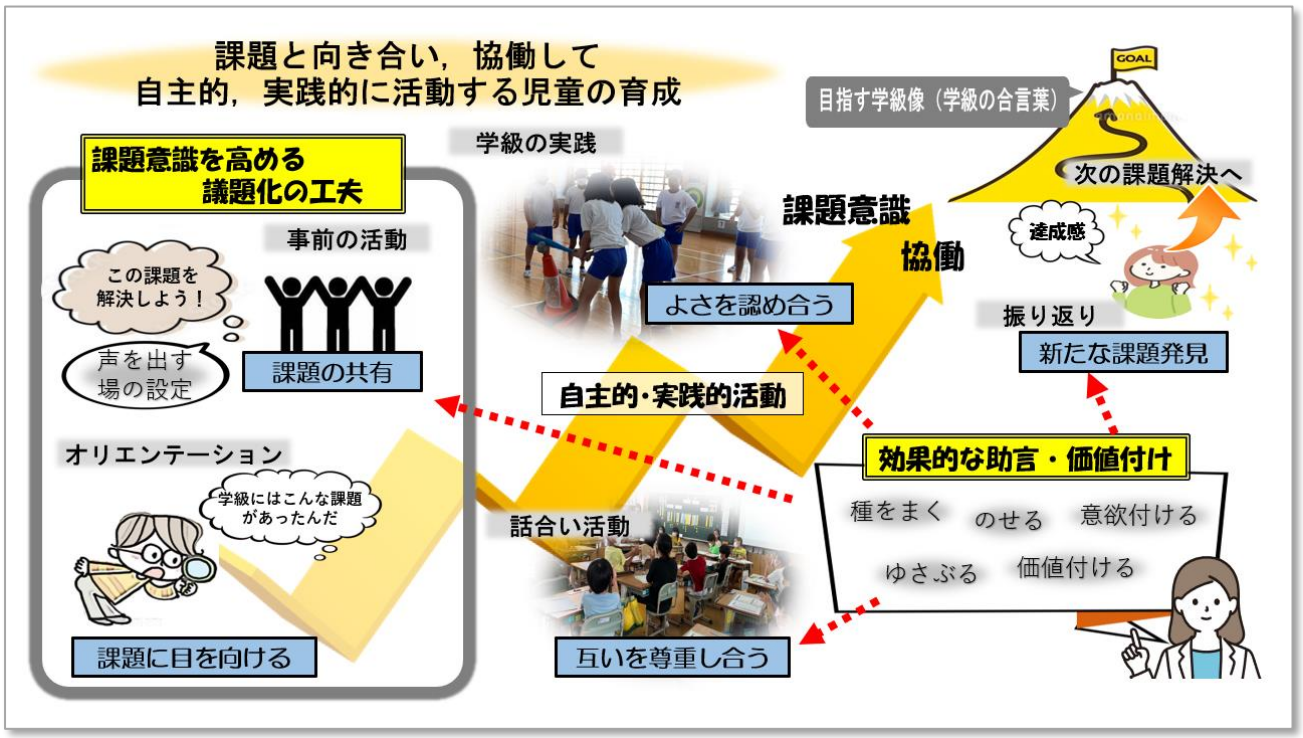
複雑で予測困難な時代となり特別活動の果たす役割が大きくなる中，互いの違いやよさを認め合い，他者と協働し課題解決する力を育むことが求められており，学級活動(1)における一連の実践を通して，集団の課題を協働的に解決する喜びや達成感を味わわせることが必要であると考える。

本研究では，課題意識を持ち，他者と協働しながら自主的に活動する児童を育てるために，二つの方策の有効性を検証した。一つ目が課題意識を高める議題化の工夫である。課題に目を向けさせ，解決すべき課題を学級全体で共有するために，オリエンテーションや議題決定までの過程を工夫した。二つ目に，一連の実践を通してどのような助言・価値付けが効果的かを検証した。先行研究をもとに助言の機能を整理し，事前・話合い・事後の活動での活用場面を想定して実践した。

その結果，一連の実践を通して児童の課題意識が高まり，協働的に課題を解決しようとする態度が見られた。また，学級をよりよくするためのさらなる課題解決への意欲にも繋げることができた。

このことから，課題意識を高める議題化の工夫と効果的な助言・価値付けを通して，課題と向き合い，協働して自主的，実践的に活動する児童を育成することができたと考える。

〈研究のイメージ〉



目　次

Ⅰ　テーマ設定理由・・・

《小学校　特別活動》

課題と向き合い，協働して自主的，実践的に活動する児童の育成

～課題意識を高める議題化の工夫と効果的な助言・価値付けを通して～

那覇市立城岳小学校教諭　神﨑　歩

Ⅰ　テーマ設定の理由

社会の変化は加速度を増し，複雑で予測困難な時代となっている。現実に，新型コロナウイルスの感染拡大のため，生活スタイルの変化が早急に求められ，学校教育の現場も集団活動の制限を余儀なくされた。このような時代にあって，「個と個」「個と集団」の関わりが弱まっていくことが危惧され，「様々な変化に積極的に向き合い，他者と協働して課題を解決していく」特別活動の果たす役割が大きくなっている。一方，学習指導要領解説特別活動編（以下，解説）において，「どのような学習過程を経ることにより資質・能力の向上につなげるのかということが必ずしも意識されないまま指導が行われてきた実態」が指摘されている。より確かな資質・能力を育成するためには，話合い活動だけでなく，一連の実践を通して学習過程や指導方法を工夫する必要がある。

本校は，「笑顔いっぱい　輝く子」の育成を目指し，教師の日常的な価値付けを通して，一人一人の違いを認め合う教育を推進している。本学級では，学級活動に関するアンケートにおいて，「友だちや学級のよいところを見つけることができる」という設問に対し，A評価が 48%であり，よさを認め合う学級の風土づくりに課題が見られた。また，「学級に課題やもっとよくしたいことがある」と答える児童が 24%と，学級への課題意識が低い実態もある。「学級の問題や課題をどのように解決するか」に対しては，「自分で解決する」が 69%を占め，「学級で話し合う」31%，「誰かに相談する」０%と，他者と協力して問題を解決する意識が低く，集団の課題を自分事として捉えながら協働的に課題を解決する学級活動の充実が必要である。

私はこれまで，よりよい合意形成に向けた話合い活動の充実に努めてきたが，一連の実践を通して集団の課題を協働的に解決する喜びや達成感を味わわせることが十分でなかった。その要因として，課題意識の共有が十分でなかったこと，話合い活動や学級の実践の中で互いに尊重し合う活動となるような指導の工夫が足りなかったこと，振り返りにおいて新たな課題解決の意欲へと繋げていく指導が不足していたことが挙げられる。その解決のためには，まず学級の課題に目を向けさせ，児童の問題意識から出発した議題決定となるよう，議題化の過程を見直す必要がある。次に，一連の実践を通して課題と向き合い，互いを認め合う風土を高めることができるよう，話合い活動だけでなく，事前や事後の活動の中でも教師が効果的に種をまき，ゆさぶり，価値付ける言葉かけをすることが大切である。そして，このような学級活動を積み重ねることで他者と協働する意義を児童に捉えさせ，主体的に自分自身や集団をよりよくしようとする力を高めることができると考える。

そこで本研究では，課題意識を高める議題化の過程を工夫し，事前・話合い・事後の活動において効果的な助言・価値付けを行うことが，課題と向き合い，他者と協働して自主的，実践的に活動しようとする児童の育成に繋がると考え，本テーマを設定した。

Ⅱ　研究目標

課題と向き合い，協働して自主的，実践的に活動する児童を育成するために，学級活動(1)において課題意識を高める議題化の工夫と，課題解決への意欲を高め，互いを尊重し合える効果的な助言・価値付けについて実践的に研究する。

Ⅲ　研究仮説

1　基本仮説

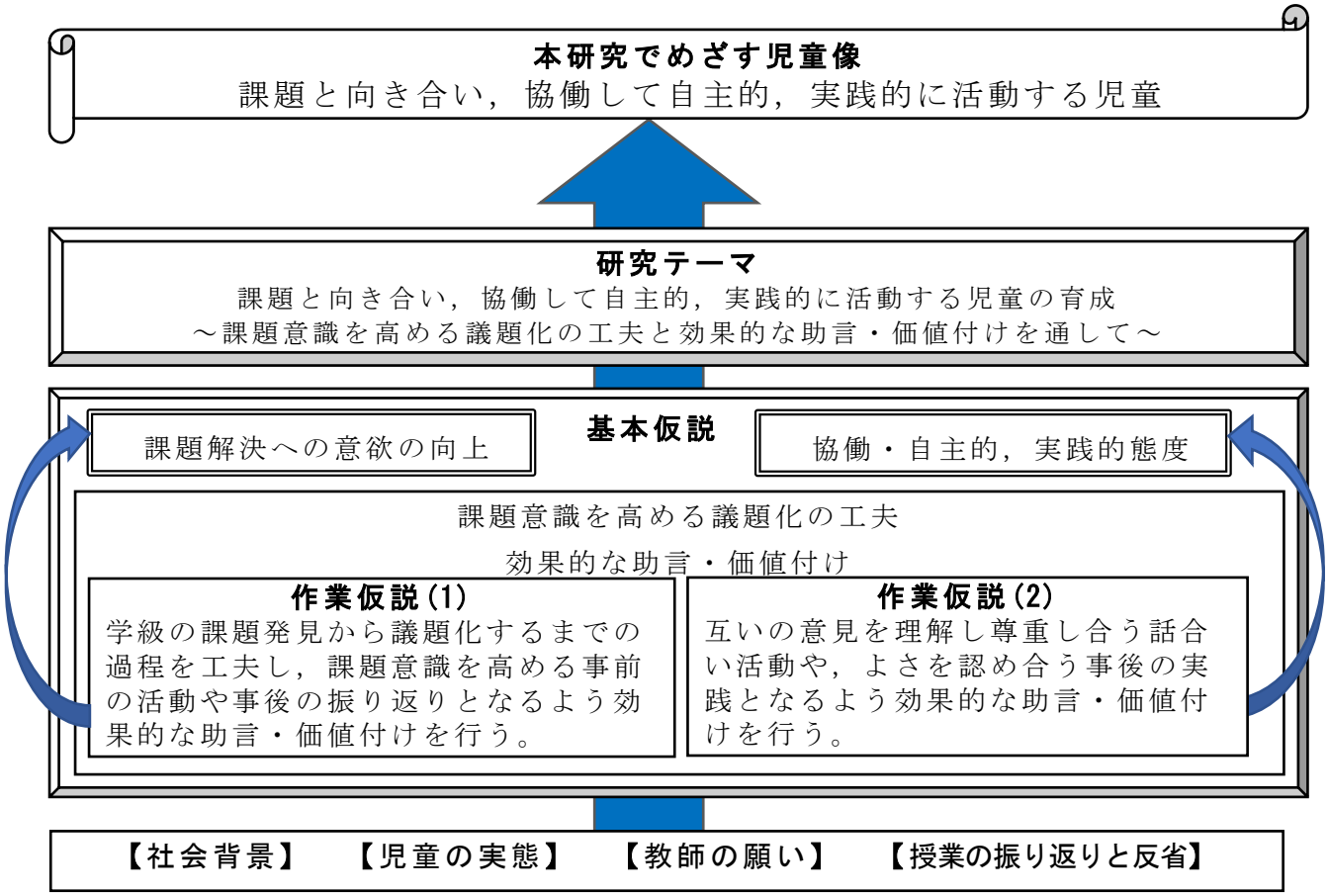
学級活動(1)において，課題意識を高める議題化の工夫と，課題解決への意欲を高め，互いを尊重し合えるよう，効果的な助言・価値付けを行えば，課題と向き合い，他者と協働して自主的,実践的に活動しようとする態度を育成することができるであろう。

2　作業仮説

(1)　学級の課題発見から議題化するまでの過程を工夫し，課題意識を高める事前の活動や事後の振り返りとなるよう効果的な助言・価値付けを行えば，課題解決への意欲を高めることができるであろう。

(2)　互いの意見を理解し尊重し合う話合い活動や，よさを認め合う事後の実践となるよう効果的な助言・価値付けを行えば，協働して自主的，実践的に課題解決に取り組むことができるであろう。

Ⅳ　研究構想図



Ⅴ　研究内容

1　課題と向き合う児童の育成

(1) 課題意識を高める議題化の工夫

解説第３章第１節において，学級や学校における生活をよりよくするための課題は，「児童の発意・発想を大切にし」ながら，「教師が適切な助言を行うことで，課題発見の視点を与え，議題の提案につなげる」ことが示されている。脇田哲郎(2021)も，問題意識の高まりに欠ける学級会を改善するためには，「子供たちの問題を掘り起こす教師の指導の工夫が必要」と指摘している。課題と向き合いながら自主的，実践的に活動するということは，「みんなで話し合って解決したい」という願いを持ちながら課題解決に挑むことであり，そのためには，学級の課題に目を向けさせる学習過程を設定し，課題意識を高める効果的な助言を行うことが必要と考える。

橋本定男(1997)は，「子どもが願いや思いをもったとき，『みんな～しよう』と全体に呼びかけることを促す『条件づくり』」が必要であり，「やるべきこと」として，「個人が全体に向けて声を出す場(システム)をつくり，機能させる」ことを挙げている。学級活動が児童の提案から始まることを考えれば，小さな声でも受け止め，全体に広げていく体制づくりが大切である。

以上のことから，課題意識を高めるためには①学級の課題に目を向けさせる学習過程を工夫し，②「個人が全体に向けて声を出す場」を設定した上で，③効果的な助言を行い議題決定することが必要と考える。そこで本研究では，図１のように学級の課題を掘り起こし，学級会の必要性に気付かせるオリエンテーションの工夫を行い，帰りの会等で「声を出す場」を設定し，議題化に必要な教師の効果的な助言について検証する。

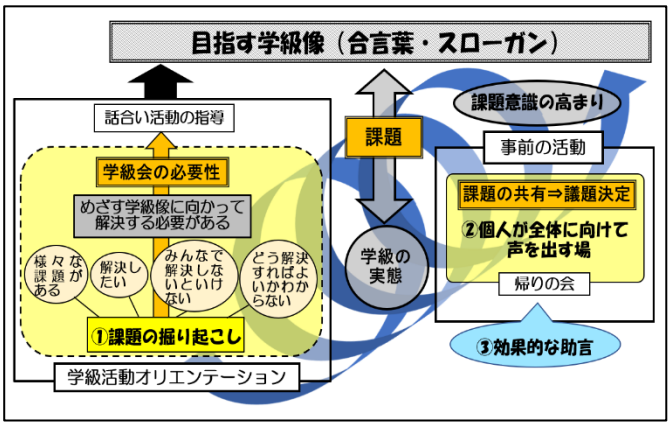


図１　課題意識を高める議題化の工夫（筆者作）

(2) 課題解決への意欲を高める振り返り

解説第３章第１節の学習過程例(図２)に示されているように，学級活動(1)における振り返りは，話合い活動だけでなく，「一連の実践の成果や課題」を振り返ることであり，「次の課題解決に生かし」，「実践の継続や新たな課題の発見につなげる」ものにしなければならない。

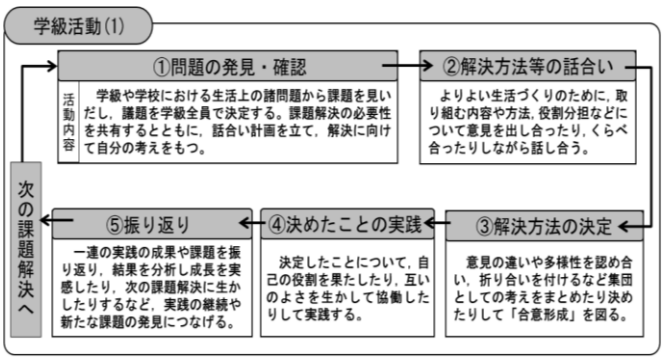


図２　学級活動(1)学習過程例

杉田洋(2013)は，児童に生活をよりよくしたいという意欲をもたせるには，「自分たちで解決可能であるという自信と解決までのイメージ(見通し)がもてていること」が必要だとしている。振り返りの場面において，自分たちでも学級の課題を解決できるという自信と喜びを共有することで，次の課題解決の意欲へとつなげることができる。そこで本研究では，一連の実践を通して児童自身や学級が成長したことに気付か

せる効果的な助言や価値付けを工夫する。

2　協働して自主的，実践的に活動する児童の育成

(1) 互いを尊重し合う話合い活動

解説第３章第１節において,「自分と異なる意見や少数の意見も尊重し，安易に多数決で決定することなく，折り合いを付けて集団としての意見をまとめることの大切さを理解」することが「自発的，自治的な活動を行っていく上での基盤となる」とし，よりよい合意形成の過程を通じて，他者と協働して日常生活の向上を図ろうとする態度を養うことが期待されている。

橋本(1997)は,「〝無理強いする合意〞や〝性急で乱暴な多数決〞」を避けるためには「相手の意見をどう『理解する』か」がポイントとしている。協働的で，自主的な実践活動を実現するためには，他者の意見を理解しながら合意形成していくことが大切であり,相互理解を促進させる教師の適切な助言が必要である。そこで本研究では，反対意見や少数意見に注目させる助言を手立てとし，互いを理解し，尊重し合う話合い活動を目指す。

(2) よさを認め合う学級の実践

解説第２章第１節において，特別活動で育む資質・能力は,「自主的，実践的な学習を通して初めて身に付くもの」とされている。「学級や学校生活をよりよくするための活動に全ての児童が取り組むことを通して，そのよさ，大切さを，一人一人が実感を伴って理解できるようにする」ことで他者と協働する集団活動の意義を理解し，自主的，実践的態度を育てることができる。

杉田(2013)は，学級の実践を成功させる要素として,「失敗に終わらせない」ことを挙げ,「どの子どもも自分の役割を果たすことができるように、(中略)教え助言し、認め励ますことを効果的に組み合わせたい」としている。実践でうまくいかない場面でも,一人一人のよさを認めながら取り組めるよう教師の助言や価値付けが必要である。

そこで本研究では，学級の実践における停滞感や困り感の原因に目を向けさせる助言や，集団活動における望ましい姿の価値付けを手立てとし，よさを認め合う学級の実践活動を目指す。

3　学級活動(1)における効果的な助言・価値付け

(1) 学級活動(1)における助言の機能

橋本(1997)は，学級活動において「どの助言を、いつ、どのように打つかつかみ、自在に打つことができるようになることを目指す」ため，助言の機能を「ガイド型」,「活性型」,「援助型」,「コーチ型」,「指示型」の５つに分類している。本研究では，その中でも「活性型」と「ガイド型」（表１）の機能に着目していく。

表１　本研究における効果的な助言・価値付けの分類と機能（橋本の分類をもとに筆者作成）

助言の分類	助言の機能	助言の内容
ガイド型	子どもの動きを方向付ける機能	(a)方向付ける(b)価値付ける(c)意欲付ける (b)(c)→本研究における価値付け
活 性 型	子どもの動きを生み出したり 活性化したりする機能	(d)ゆさぶる(e)種をまく(f)のせる

「ガイド型」は，提案理由やめあてに意識を向けさせ軌道修正を図り(a)，合意形成に向かうための発言や態度を取り上げ(b)，素晴らしいと励ます(c)助言である。この

中でも(b)(c)は，自主的，実践的活動への児童の意欲を高め，互いのよさや考えを認め合う態度を育む効果的な価値付けとしての機能を持つと考える。次に「活性型」は，対立意見の発言を促したり，反対意見に注目させたりする(d)助言や，学級の課題に気付かせたり(e)，課題を解決するためのやる気を高めたりする(f)助言であり，課題意識を高め，多様な考えを理解し合う態度を育てる上で有効な助言と考える。

そこで，活性型とガイド型の(b)(c)を本研究における「効果的な助言・価値付け」と捉え，その効果を検証する。

(2) 事前・話合い・事後の活動における効果的な助言・価値付け

橋本(1997)は「その場でタイミングよく出て，改めてその動き・姿」を取り出し，「解釈・意味付けをして光らせる」ことが助言の原則としている。助言・価値付けを効果的に行うには，タイミングや方法が重要であり，特に事前・事後の活動では，計画委員会や集会活動のみならず，日常の生活場面で個や集団に対し適宜助言を行うことが大切である。そこで本研究では,各活動における具体的な助言のイメージを図３，４，５のように整理し効果的に助言・価値付けができるよう実践する。

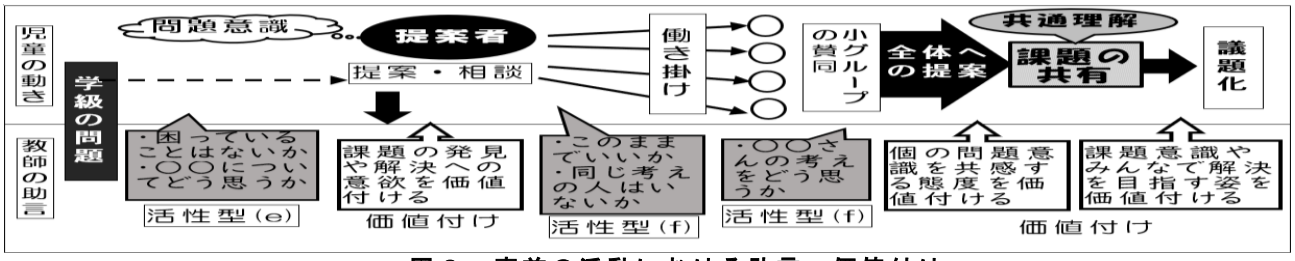


図３　事前の活動における助言・価値付け

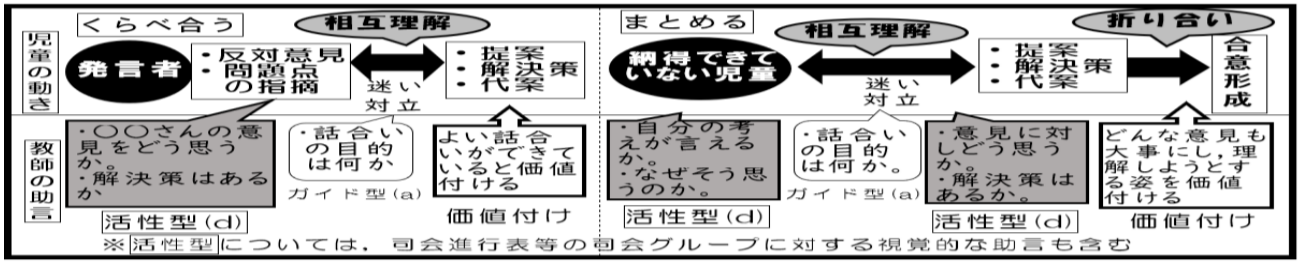


図４　話合い活動における助言・価値付け

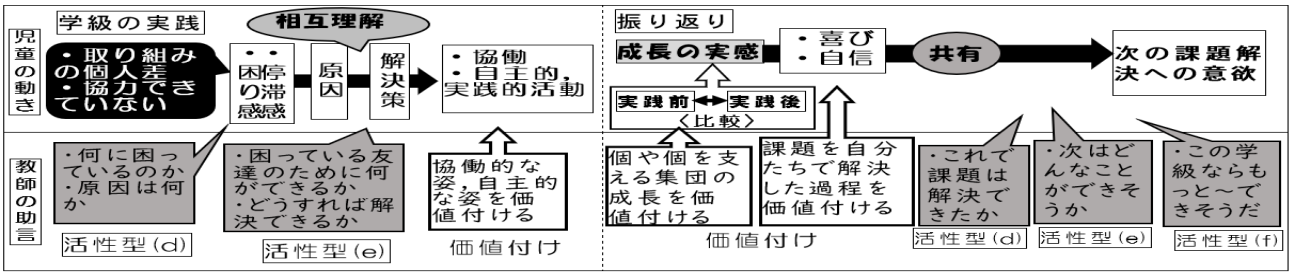


図５　事後の活動における助言・価値付け

Ⅵ　授業実践（第４学年）

１　議題　「みんなでなかよくあそぼう会」
２　議題選定の理由 学級の合言葉を意識して行動できるか実践すると，振り返りで「合言葉を意識するのが難しいので，全員での取り組みが必要」という課題が出た。帰りの会（声を出す場）に考えを出し合うと，みんなで遊ぶ会をしたいという意見が多く，その目的を問うと「いろんな友達と仲を深めたい」という提案が出され，議題に決定した。

3　事前の活動

実施日/対象	時間	内容	・教師の働きかけ 活 活性型助言　価 価値付け
6月15日(水) 学級全員	帰りの会 (声を出す場)	・学級の課題に対する解決方法についての話合い。 ・議題の決定。	**活 解決方法を問いかける。** **価 課題を発見し，解決しようとする態度を価値付ける。**
6月22日(水) 学級全員	帰りの会 (声を出す場)	・話合いの目的，内容の共通理解。	・遊びのルールは工夫できることを助言する。
6月24日(金) 計画委員会	業間休み，放課後	・活動計画と進行の仕方の確認。 ・学級活動コーナーへの掲示。	**活 反対意見や少数意見がある際の対応を司会進行表で確認する。**
6月30日(木) 学級全員	朝の会，業間休み	・学級会ノートへの記入。	**価 コメントを記入し，児童の考えのよさを価値付ける。**

4　本時（話合い活動）の展開

ねらい	これまでの自分たちの学級生活を振り返り，学級の課題を解決するための取り組みの工夫について話合いをすることで，みんなで楽しい学級生活をつくることの意義に気づき，協力して実践しようとする態度を育てる。
作業仮説(1)	「くらべ合う」「まとめる」場面で少数意見や反対意見に注目させる助言を行えば，一人一人の考えを理解し，尊重し合いながら合意形成できるだろう。

段階	話合いの順序	指導上の留意点　○教師の働きかけ　活 活性型助言　価 価値付け
導入	1　提案理由やめあての確認 2　決まっていることの確認 3　教師の話	・提案理由 今の様子：合言葉に近づくためにみんなで取り組む活動が必要。 どうする：「みんなでなかよくあそぼう会」をする。 目指す姿：準備で助け合ったり全力で遊んだりして学級の仲が深まる。 ○パワーポイントを活用し，話し合う目的や振り返りの視点を確認し，望ましい合意形成に導けるようにする。
展開	4　話合い (1)話し合うこと① どんな遊びをするか (2)話し合うこと② 必要な役割	○座席表で確認し，少数意見も出させる。 **活 反対意見が出た時は，その意見に注目させる助言をする。** ○話合いが停滞したときは，話合いの整理を促す助言をし，ペアや少人数で話し合う時間を取る。 **価 建設的な意見や望ましい話合いの態度を価値付ける。** ○合意形成に迷う時は，取り組みの目的やこれまでの話合いを整理する助言をする。
終末	5　先生の話 6　話合いの振り返り 7　おわりの言葉	**価 話し合う態度や合意形成に向けた姿勢を価値付ける。** ○今後の課題を伝える。 **価 協働的に学級の実践へ取り組めるよう意欲付けをする。** **価 司会グループのがんばりや進行で良かった点を称賛する。**

5　事後の活動

実施日/対象	時間	内容	活 活性型助言　価 価値付け
7月8日(金) ～13日(水) 学級全員	業間休み 放課後	役割分担と集会の準備	**活 困り感を見取り，個や全体へ原因や解決策を問う助言をする。**
7月15(金) 学級全員	学級活動	みんなでなかよくあそぼう会	**価 自主的な活動や協働する姿を価値付ける。**
7月15日(金) 学級全員	学級活動	実践の振り返り (写真を見ながら自分や学級の成長に気付く)	**価 個や学級の成長に気付かせ，価値付ける。** **活 学級の合言葉に着目させ，次の課題発見に向かわせる助言をする。**

Ⅶ　結果と考察

1　作業仮説(1)の検証

学級の課題発見から議題化するまでの過程を工夫し，課題意識を高める事前の活動や事後の振り返りとなるよう助言・価値付けを行えば，課題解決への意欲を高めることができるであろう。

【結果】

オリエンテーションでは，「学級に課題やもっとよくしたいことがある」という児童が24%というアンケート結果(Google フォーム)を示し，「協力したい」，「仲の良いクラスにしたい」という願いをもつ児童がいることに注目させた。少数意見に目を向けることで，課題はないと答えていた児童から「友達が困っていることを解決したい」「改善するために協力したい」という意見が出された。どう解決するか問うと「少しずつやらないといけない」，「難しそう」という声があったので，目指す学級の姿を決めることで解決する方法を話し合えることを教師から示した。その後，学級の合言葉を決めるために学級で大事にしたいことにつ

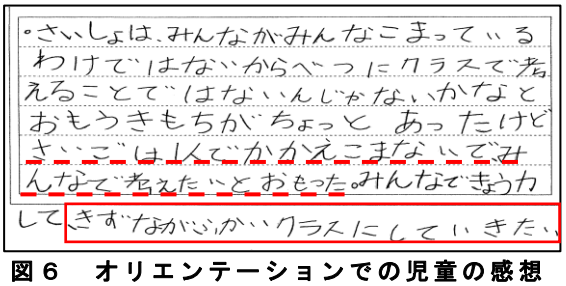


図6　オリエンテーションでの児童の感想

いて意見を出し合った。このオリエンテーションの感想で，90％の児童が学級の課題や目指す学級像について記述することができた。その中には，図６のような記述もあった。

本検証の前には，学級の合言葉を意識して生活できるかを実践した。事前の活動では，そこで出た課題（学級の合言葉を意識するのが難しい）について帰りの会の声を出す場で具体的にどんな取り組みをするか話し合い，児童から様々な意見（図７）が出た。「友達の意見をどう思うか」「何のためにやるのか」助言すると，「仲を深めるために一緒に遊ぶ」という提案に「準備でも協力できる」「全力で遊べば合言葉を達成できる」と賛同意見が集まり，議題決定に至った。

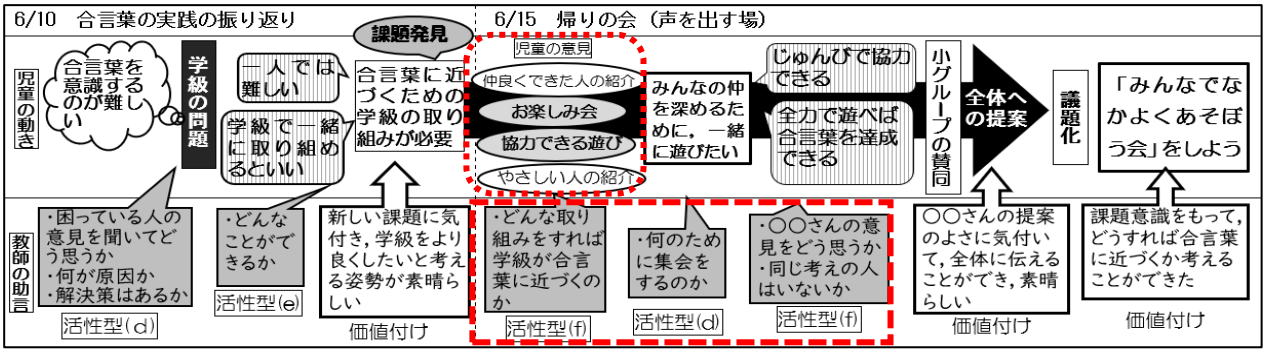


図７　本検証における事前の活動の助言・価値付け

図８は学級会で集会に必要な役割を決めた場面である。「音楽をかける役割」にＡ児が反対意見を出したが，Ｂ児が「今日のめあては『仲を深める』だから」と発言した。この意見にＡ児や周囲も納得し，合意形成ができた。

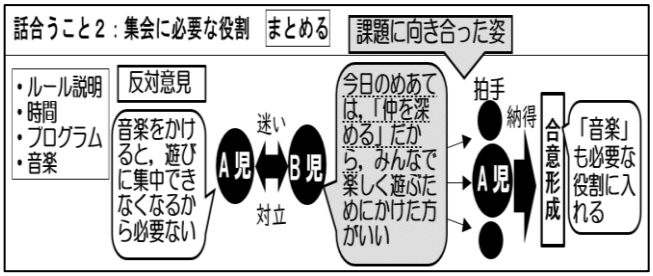


図８　集会に必要な役割を決めた場面

図９は，振り返りの流れと教師の助言を示している。まず，写真を見せながら自分たちで準備を進められたことや助け合って集会活動ができた姿を価値付けた。次に学級の合言葉と今の自分たちを比較させながら，「もっとこうしたかったことはなかったか」助言した。すると，「勝負に熱くなりすぎた」「(合言葉の)『やさしく』が足りなかった」等課題が出てきた。「この課題をそのままにしてよいか」さらに助言すると，集会に再挑戦したいとの意見に多くの児童が賛同したので，「そのためにどうしたらいいか」助言し，振り返りを記述させた。

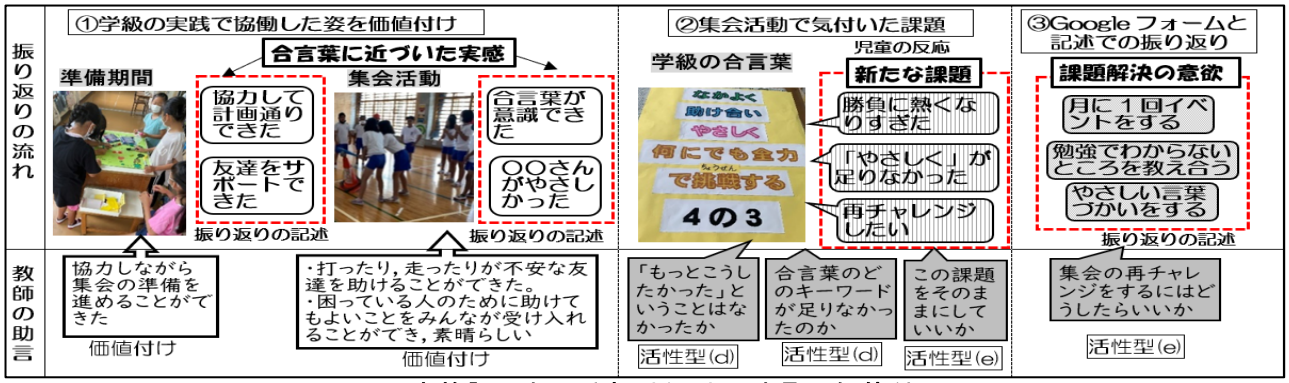


図９　本検証における振り返りの助言・価値付け

学級の課題であった「合言葉を意識できたか」の変容（図 10）を見ると，肯定的な答えが 86％に増え，その中でも「よくできた」が 24％上昇した。

【考察】

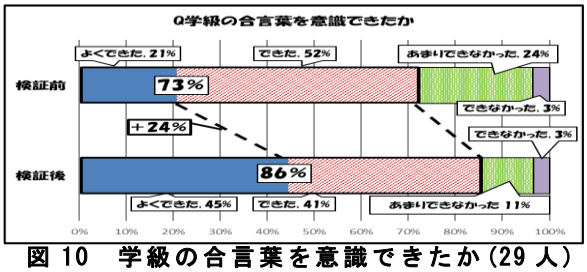


図 10　学級の合言葉を意識できたか(29 人)

オリエンテーション前は，学級に対する課題意識が低かったが，実施後ほとんどの児童が目指す学級像について記述したことから，課題意識が高まったと考える。これは，アンケート結果等の具体的な資料や意見交流を通して他者の考えに触れたことで，図６のようにこれまで課題を感じていなかった児童も学級の問題や改善点に気付くことができたためと考える。また，協働して解決する意義への理解を深めたことで，学級で話し合う必要性も捉えさせることができた。

本時において，話合いのめあてに沿った児童の発言や，それを建設的な意見として全体が承認できたことは，学級の課題と向き合って話し合った姿と捉えられる。これは，計画委員会から議題を下ろすのではなく，一人一人が意見を出せる場を設定し，活性型助言で個の問題が全体の課題であることに気付かせることができたためと考える。議題化の過程の中で，学級の課題を掘り起こし，話し合う目的を共有したことで課題意識が高まり，自分たちで軌道修正して合意形成することに繋がったと考える。

振り返りの「協力して計画通りできた」「合言葉を意識できた」等の記述（図９）からは，自分や学級の成長に対する手応えが見られる。これは，課題解決に向けて努力した姿を具体的に価値付けたことで，学級が成長したという実感を持たせることができたためと考える。また「月に１回イベントをする」「教え合って助け合う」等の記述からは，次の課題解決に向けた意欲が見られる。これはうまくいかなかった場面も取り上げ，一連の実践と学級の合言葉を比較できるよう活性型助言をすることで，新たな課題に気付かせることができたためと考える。そして，本検証を通して学級の課題に対する意識の向上（図 10）が見られたことから，このような一連の実践を積み重ねていくことで，課題と向き合う児童の育成に繋がると考える。

よって，学級の課題発見から議題化するまでの過程を工夫し，課題意識を高める事前の活動や事後の振り返りとなるよう助言・価値付けを行うことは，課題解決への意欲を高めるために有効な手立てと考える。

２　作業仮説(2)の検証

互いの意見を理解し尊重し合う話合い活動や，一人一人のよさを認め合う事後の実践となるよう効果的な助言・価値付けを行えば，協働して自主的，実践的に課題解決に取り組むことができるであろう。

【結果】

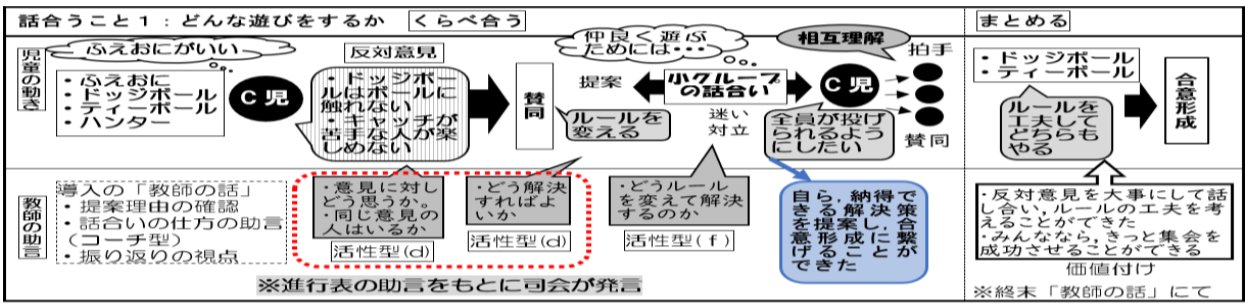


図 11　本検証における話合い活動の助言・価値付け

図 11 はどんな遊びをするか話し合った場面である。反対意見が出た時の対応を計画委員会へ事前に伝え，司会進行表で確認できるようにした。「くらべ合う」では，C 児が

ドッジボールに対し反対意見を出した。司会が「どう思うか」問いかけると，他の児童からも同様の意見が挙がった。「どう解決すればよいか」司会に尋ねさせると，児童から「ルールを変える」と提案があった。そこで，「どうルールを変えて解決するのか」小グループで話し合う時間をとった。すると，「ドッジボールは全員が投げられるようにしたい」と，C児自ら解決策を提案し，ドッジボールとティーボールのどちらもルールを工夫して実施することで合意形成ができた。終末の「教師の話」の中で，反対意見を大事にして解決策を話し合うことで，ルールの工夫を考えることができたことを価値付けた。前回の学級会と本時の自己評価を比較すると，「友達の考えを理解して聞くことができたか」（図 12）に「よくできた」と答えた児童が 14%上昇し，話合いの感想には図 13 のような記述が見られた。

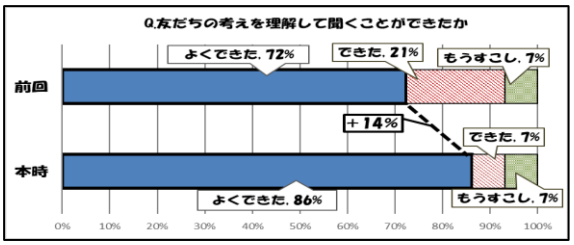


図 12　学級会後の自己評価の比較（29 人）

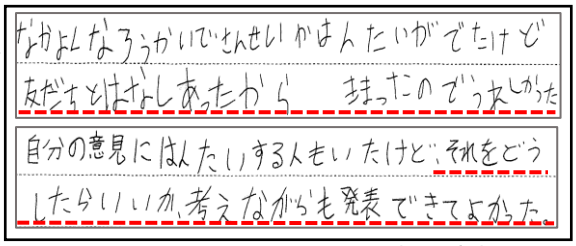


図 13　話合い活動での児童の感想

集会活動（図 14）では，D児がティーボールで打ったり走ったりすることへの不安を口にした。周囲に「どうしたら解決できるか」助言すると，打ち方を教えたり，「一緒に打とうか？」と声をかけたりする児童が現れた。その姿を価値付けると，同様の困り感を持つ児童に対し，他の児童も助けたり励ましたりする声かけができた。図 15 はその時の児童の感想である。

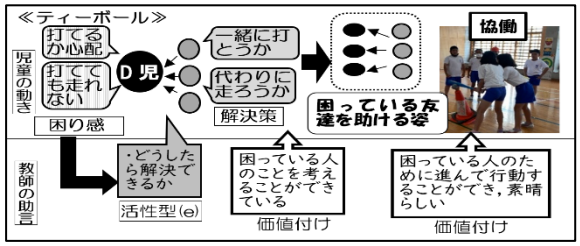


図 14　集会活動の助言・価値付け

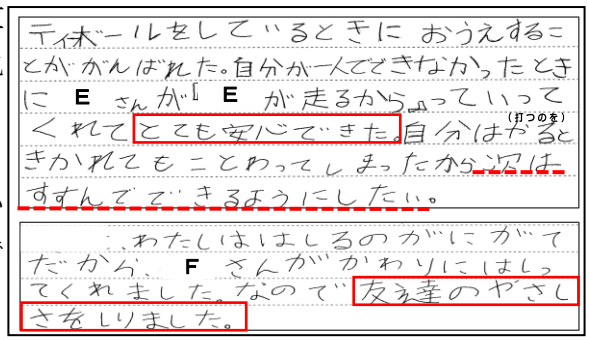


図 15　集会での児童の感想

学級活動アンケートでは，「友達や学級のよいところを見つけることができるか」（図 16）で「思う」が大きく上昇（＋21%）した。また，「学級の課題をどのように解決するか」では，検証前は「学級で話し合って解決する」（図 17）が 31%だったが，検証後は 59%（＋28%）に上昇した。

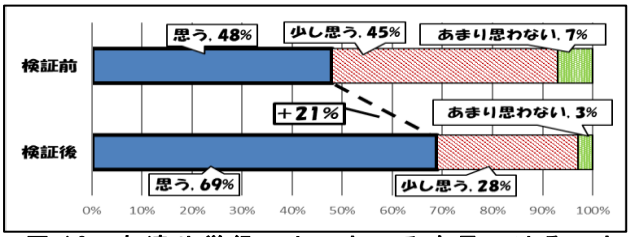


図 16　友達や学級のよいところを見つけることができるか（29 人）

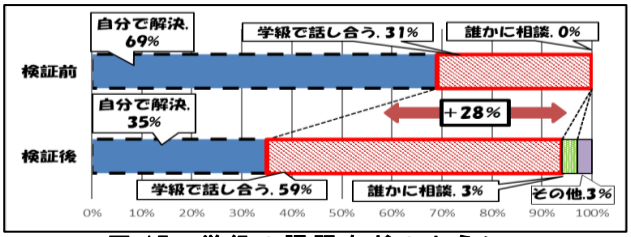


図 17　学級の課題をどのように解決するか（29 人）

【考察】

図 12 からは，話合い活動を通して他者の意見を理解しようとする児童の意識が高まったことがわかる。これは，反対意見に対する解決策について話し合いながら合意形成できたためと考える。「解決策はあるか」という助言により，自分の思いだけで意

見を述べていた児童らが，異なる意見を持つ他者の思いに目を向けることで，互いの意見を理解しようとする態度が高まったと考える。また図 13 の児童の記述から，異なる意見も大事にしながら話し合うよさに気付かせることができたことがわかる。これは「教師の話」の中で多様な意見を尊重しながら自分達で創意工夫した姿を価値付けたことで，寛容さをもって自他を尊重し合うよさを捉えさせることができたためと考える。そして，このような話合い活動を継続し，その都度効果的に価値付けていくことにより，互いを尊重し合う意義への理解をさらに深めることができると考える。

集会活動では,「苦手な児童も楽しめるよう助けてもよい」ことを全員が受け入れ，協働しながら遊びを楽しもうとする姿があった。これは，活性型助言により他者への理解を促し,学級や友達のためにできることを考えさせたことが要因と考える。また，協働する姿や一人一人のよさを価値付けることで，他の児童の自主的活動への意欲も引き出すことができたと考える。これにより，困り感のある児童を助ける声かけや行動が広がり，図 15 の児童の感想にあるように，これまで気付かなかった他者のよさに気付かせることができた。さらに,「次は進んでできるようにしたい」と集団の中で自主的に行動することの大切さを実感させることにも繋がった。そして,この自主的,実践的活動を通して，友達や学級のよさに児童が気付いたり（図 16)，協働して課題を解決する意義を深めたり（図 17）することができたと考える。

よって，互いの意見を理解し尊重し合う話合い活動や，一人一人のよさを認め合う事後の実践となるよう助言・価値付けを行うことは，協働して自主的，実践的に課題解決に取り組むことに有効な手立てと考える。

Ⅷ　成果と課題

１　成果

(1)　議題化の過程において，課題を掘り起こすオリエンテーションを工夫し，全体に向けて声を出す場を設定したことで,学級の課題に目を向けさせ,課題意識を高めることができた。

(2)　一連の実践を通して，課題に目を向けさせ相互理解を促す活性型助言を行い,学級の成長や一人一人のよさを具体的に価値付けることで，課題解決への意欲を高め，協働して課題を解決しようとする児童の育成に繋げることができた。

２　課題

一連の実践を重ねるごとに,児童同士で課題解決に向けた声かけや認め合う言葉かけができるようにすることを見据えて,児童の課題意識や自主性をさらに高めるための継続的な指導の工夫について研究する必要がある。

≪主な参考文献≫

『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説特別活動編』文部科学省　東洋館出版社　2018

『子どもが力をつける話合いの助言』　橋本定男　明治図書出版　1997

『自分を鍛え、集団を創る！　特別活動の教育技術』　杉田洋　小学館　2013

『特別活動で学校が変わる！　Society5.0 時代に生きる〝協働〟する力の育成』
杉田洋監修　特別活動希望の会　脇田哲郎　他４名編著　小学館　2021